

20 世紀に分断されたモンゴル文学の行方国境を越えてお互いが刺激し合えるようになれるか

2013. 11. 25 (月) 荒井 幸康

「20 世紀モンゴル文学、評価と教訓」は 2013 年 8 月 15～16 日、モンゴル国の首都ウランバートルで行われた会議である。

モンゴル科学アカデミーや国際モンゴル学会、モンゴル国立大学などが組織したこの会議には開催国のモンゴル国をはじめ、中国の内モンゴルのモンゴル人、ロシアのモンゴル系民族ブリヤート人、その他、日本から文学やその周辺の研究領域の研究者、40～50 人が参加し、議論が戦わされた。

それぞれの国ごとに発展してきたモンゴル文学



内モンゴルで出たモンゴル文字のボヤンネメフ全集

総人口 1000 万に満たないモンゴル系諸語の話者に向けられた文学は、その規模の小ささや国や地域で分断された歴史から、日本文学では想像できないような特徴を持つ。

今回はモンゴル諸族の文学についての現状、この会議に参加しての印象、雑感を述べてみたいと思う。

今回行われた会議はモンゴル国だけでなく、内モンゴルや、ロシアのブリヤート人（そして日本人）も参加している。ということからすれば、国境を越えたモンゴル民族の文学を対象にしているように見える。

しかし、上記会議での発表に見える文学の時代区分に関する議論などを見ると、内モンゴルの文学史では文化大革命に関する言及があり、つまり、中国の文学史とは切り離せず、ブリヤートに関しては、ロシア文学の時代区分に縛られ、独立しているモンゴル国の文学の時代区分とは一致しないものになっている。

つまるところ、20世紀の文学の歴史は国境を越えず、それぞれの国家史に回収されているように見えた。

ここから見えるのは、20世紀の現代文学の歴史に関して言えば、内モンゴルには内モンゴル文学史があり、ロシアにいるモンゴル系のブリヤート人やカルムイク人にはそれぞれ別個の文学史が存在し、それぞれがあたかも交流を持たなかったかのように歴史が書かれているということである。

その分断されたものを振り返って評価するということになる、非常に複雑になるのではないかと考えたりするのだが、ある程度共通の言語（ある専門家に言わせると、ブリヤート語は全部理解できないということもあるようだ）で、何事もないように行われた。

個別であることを強調しすぎたが、歴史上には国境を越えて活躍した作家は存在する。

ソドノムバルジリン・ボヤンネメフ（1902－1937）がまずその筆頭に挙げられる人物であるが、彼は1902年、現在のモンゴル国に生まれ、35年の短い人生の一時期を内モンゴルとブリヤートでも過ごした。

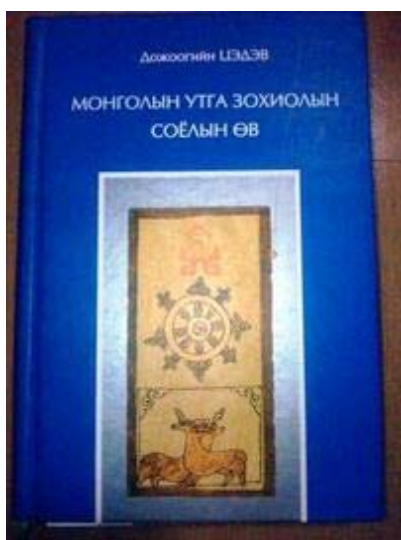
内モンゴルでは雑誌の編集者として働き、ブリヤートではモンゴル語の教師もし、ブリヤートの文学雑誌に作品を発表、ロシア語とモンゴル語の辞書の編集にも従事した。このような経緯から現在は3つの国に分断されたいずれの地域にもそれなりの足跡を残している。

ただし、ブリヤート文学史においては、その活躍は無視されている。それは彼がブリヤート人ではないからのようである。

不思議なのは、このボヤンネメフとブリヤート人の作家は、同じ雑誌に同じ文字を使って、ほぼ同じものとして読むことができる言語で書いているのに、1つはブリヤート文学、もう1つはモンゴル文学と分類されているということである。

共通のモンゴル文字（ブリヤートは1936年、モンゴルは1946年廃止）で書かれた時代のブリヤート人とモンゴル人の言語意識に関して語るのは非常に難しいが、現在は、同じキリル文字で書かれていても正書法が違い、視覚的にお互いがお互いを違う言語と認識できる状況が作られた。

内モンゴルで全集が出版されたボヤンネメフ



D. ツェデブ氏の『モンゴル文学の文化的遺産』

言語が違うということは民族が違うということになり、当然、文学もモンゴル文学とブリヤート文学は、特に20世紀の文学については相互排他的に存在している（ロシア革命以前の文学では叙事詩で「共有」しているものがある）

なお、21世紀になり、ボヤンネメフは再び注目され、なんと内モンゴルで4巻本の全集が出版されている。全集は3つの地域に関係なくほぼすべてを収録できたものだとこの学会参加者で、編集に携わった中央民族大学のワンマンドガ先生から聞くことができた。

前回、モンゴル国では1946年にモンゴル文字を廃し、ロシア語と同じキリル文字にしたため、モンゴル文字をすらすらと読める人の数が少なくなっているこ

とを書いたが、日常モンゴル文字を使っている中国内モンゴルの文学研究者は、ボヤンネメフがモンゴル文字で残した文学作品のオリジナルに、直接あたることのできるの編集、出版には有利だったからかもしれない。

なお、モンゴル国では選集がキリル文字に直して再出版されているが、現在、この内モンゴルで出た全集を元に、キリル文字版の全集の出版準備が進められている。

20 世紀、モンゴル系の人々が文字の改革を行う前、モンゴル文字は広い通用範囲を持っていた。20 世紀前半を生きた有名なロシアのモンゴル学者、ウラジーミルツォフの言葉で語ればこのようになる。

「ブリヤート人が書いたものを、北京の道端でモンゴル人が読むことができ、ホブド（訳者注、今のモンゴル国の西部）のドルベットが書いたものをチベットの辺境に住むモンゴル人が読むことができる。この、1つの共通の財産、まさに同じような現象があちらこちらで見られないだろうか？ 見られたし、現在においても見られるのである」

余談だが、この言葉は、ウラジーミルツォフがボルガ河沿岸の地域に住むモンゴル系の民族、カルムイク人の前で 1928 年に行った発言である。

モンゴル文字を読んでいる風景が「あちらこちらで見られないだろうか」と、あえて遠く離れたカルムイク人の地で語ったことの裏には、カルムイクもその「あちらこちら」に入る土地で、モンゴル文字の通用範囲だったことを推測させる。

いずれにせよ、モンゴル文字が通用する範囲は、モンゴル、内モンゴル、新疆や青海省からバイカル湖周辺のブリヤート人地域、そしてボルガ河下流域へと国境を越えて広がっていた。

思えば 20 世紀のモンゴル諸族の文学は、それぞれの地域で発展しつつも、共通した文字圏を崩壊させ、分裂したという結果を生んだ。

さらにモンゴル文字を廃した地域の文学は最終的にはキリル文字を採用し、地域ごとに別々の正書法を作り上げた（1920-40 年代の文字改革を通じキリル文字を使用するモンゴル語、ブリヤート語、カルムイク語は文字は同じでも別の正書法を持つに至った）。

現在、モンゴル国においては、文学は、1990年代以降の市場経済への体制転換期に一時期、出版活動が衰えたと思えた時期もあったが、現在は現代的なテーマや改めて以前の歴史的な解釈を再考するテーマなど重厚な文学が書かれている。

市場が急速に縮んだブリヤート文学



モンゴル系諸民族の分布図：赤の部分の Mongolia と書かれたモンゴル国と北側のロシアにはみ出た部分がブリヤート人地域、南が中国のモンゴル人地域を示す。西側のカスピ海西岸にカルムイク人が住む。オレンジ色の枠は13世紀のモンゴル帝国の版図（ウィキペディアより）

内モンゴルにおいても、昔からマルチンフー（1930ー、中国語の音訳でマラチンフと書かれることもある）など、中国語で創作活動を行う人はいたが、まだまだモンゴル語での創作活動も衰えていない。

しかし、ロシアのモンゴル系民族であるブリヤート人やカルムイク人において、ブリヤートはまだ長編作品がブリヤート語で書かれているのでまだ安泰と思われるが、カルムイクにおいてカルムイク語での創作は歌や詩のレベルにとどまり長編、中篇の作品が見られなくなっている状況になっている。

1907年、ほぼ100年前、ブリヤート人活動家のM/ボグダノフは、ペシミスティックに以下のように述べている。

「ブリヤートの学者や文学者の作品を売るための市場は十分に広いものだと言えるだろうか？ ロシア語や他の言語のようなより広い読者層と、より多く

の価値の分かる人たちと、より巧みな評価と出合える言語で自分の作品を読むことを好まないだろうか？ ブリヤート文学はせいぜい良くても、みすぼらしくて不格好な翻訳から成り立ってしまうことにならないだろうか？」

ここからも分かるように、1936年にモンゴル文字を廃して以降、ブリヤート文学は残りのモンゴル世界と切り離され、市場が非常に小さくなった。より広く読者を獲得するどころか逆の道を行ったのである。

ブリヤートから参加したある文学研究者は、今回の会議で、ブリヤート人のブリヤート語能力の低下を嘆いた。

ロシア語ができることが少数民族にとって、ロシア社会での成功の鍵の1つである状況から、ブリヤート人自身によるブリヤート語離れが進んでいるのだと言えるのだが、果たして、もしも言語の市場が大きく保たれていたらどうなっていたのだろうか、ということを考えてたくもなる。

しかし、一国家、一言語を理想とする近代国家においては、少数民族の存在を認めたとしても、厳密に国外にいるものとは差異化を求め、「形式においては民族的」であっても社会的な価値観の「内容においては同化主義的」にならざるを得ないだろうと考えると、その「もしも」が現実になるのは非常に難しかっただろうと考えられる。

それを踏まえて近代以降の少数民族の文学の扱いをどう評価するかを改めて考えてみると、中国でもモンゴルでも、時代区分を含め、あたかも国家の一地方の文学であるような記述としてまとめられているのは無理もないように思える。

例えば、ブリヤート文学史には、ブリヤート人のみならず、ブリヤート共和国に住むロシア人やエベンキ人の作家の名前が挙げられていたことも、地域の枠組みが基準であったことと考える根拠になり得る。

分断された文学の交流に期待

そのような国家の枠組みが強く意識された文学の研究状況に、最初の一石を投じたのは、2011年8月にモンゴル国で日本モンゴル文学会の主催して行われた会議「モンゴル諸族の現代文学－跨境的視点から」である。

この会議で各地の研究者はおそらく会議以前から個別に持ち続けていたであろう、国境を取り払った形で文学を見てみるべきという問題意識を共有することができた。今回の会議の趣旨説明においても、この2年前の会議が前提にあって行われたこのような会議を組織したことが触れられていた。

内モンゴルの文学研究者が、モンゴル国の作家の全集を出版し、さらにブリヤートの研究者を呼び、大学で講義させる。あるいはモンゴル研究者がブリヤートの文学研究者と共同研究を行うなど、この分野での研究は、活発化してきている。

20世紀半ばから1990年代にかけても、実際、交流はあった。ほぼ60年に及ぶ研究活動を行い、自らも創作活動をするD. ツェデブ氏がこの会議に合わせて発表した『モンゴル文学の文化的遺産』の中では、国境を越え、様々な多くの人と交流した記録が残されている。いままではそれが文学史において特筆すべきできごとでなかったが、今後は強調されることになるであろう。

20世紀のモンゴル諸族の文学は国ごとに分断された文学になってしまったかもしれない。

しかし、ここからのモンゴル諸族の文学の創作活動に関しては、まずは文学研究者の共同研究などから始まり、最終的には作家たちの交流が密になり、21世紀は国境を越えたモンゴル諸族の緩やかな共通の文学空間が作られ、その中でお互いがお互いを刺激し合うような形になればと期待している。

<http://jbpress.ismedia.jp/articles/-/39230>